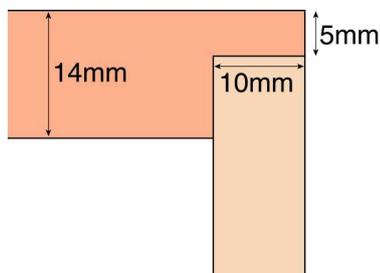


## 包み継ぎの箱づくり



包み継ぎの箱を作ろう。写真のように短い方の板に段欠き加工するだけで作れる。



加工する短い方の材は、長い方より少し厚い方が、見た目もよく、接着面積も広がるので丈夫になる。

段欠き部分の寸法は図の通り。まず、前面から 5mm離れたところに深さ 10mmの切込みを入れる。

それには切込み深さを 10mmに制限するためノコ刃にストッパーを貼る。自作の切込み深さ設定ボードにノコ刃を置き、幅 10mmの棒を当てがう。そこにストッパーを貼れば、10mmの深さ設定ができる。写真のアイススティックがストッパー。その隣りが幅 10mm棒。更にその隣りは切込み深さ設定ボードに取付けられているフェンス。

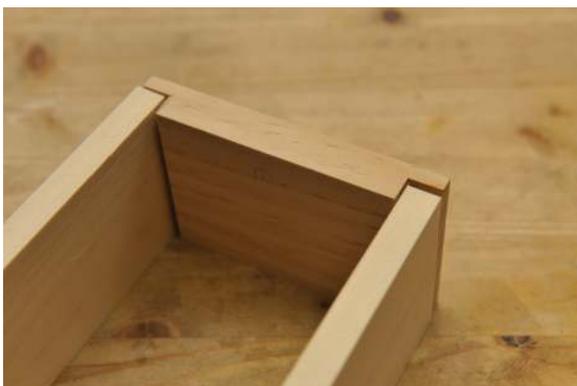


ベース板に材をクランプし、深さ 10mmの切込みを入れているところ。ノコ刃の後ろに少し見えるこげ茶色の部分は 5mm厚のスペーサー。これにより、板の前面から 5mm離れたところに切込みを入れることができる。切り込んだら、段欠きし、切り落とす部分に×印をつけておこう。



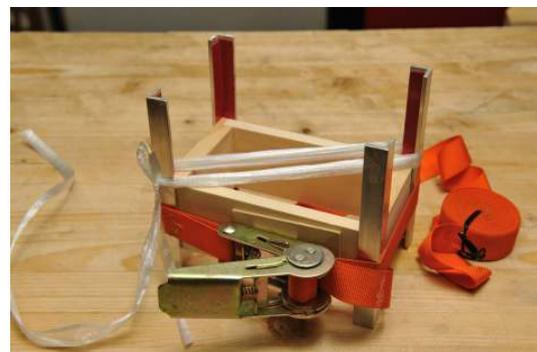


直角ガイドから剤を 10mm出してクランプし、段欠き部分を切り落とす。この時の10mm出す方法だが、写真のように長い方の材をあてがい、現物を利用してセットするとより正確になる。



仮組みし、全体の噛み合わせをチェックしてから接着工程に移る。

今回は接着にベルトクランプを使っている。ベルトクランプで締め付けると大きな力がかかるため、各コーナーにアルミのアンクル材をあてがい、板を保護している。アンクル材の内側にはビニールテープが貼ってあり、接着剤の剥がれをよくしている。スコヤで箱の直角を確認し、角度の修正にはアンクル材にひもをかけて行くと簡単。





段差はカンナで修正し、平らな石盤（定盤）上でサンダーがけすれば、上面／底面とも平らに仕上がる。この石盤はカンナの刃を研ぐ砥石を平らにするときのもの。次に、箱の周囲をカンナがけして仕上げる。ブロックプレーンと No.4 ベンチプレーンで仕上げる。



最後に底板を受ける、細い棒を箱の内側に接着し、そこに底板を落とし込み接着すれば、包み継ぎの箱が完成する。

